The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代日本語とロシア語における外来語の比較・対照研究 : 和露フォールス・フレンド辞典の作成をめざして
Author(s)	Kubrakova, Natalia
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59893
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【２】

氏　　名	KUBRAKOVA NATALIA（クブラコワ ナタリア）
博士の専攻分野の名称	博　士（日本語・日本文化）
学　位　記　番　号	第　２６１３５　号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**現代日本語とロシア語における外来語の比較・対照研究** **－和露フォールス・フレンド辞典の作成をめざして－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　鈴木　　睦 （副査） 教　授　堀江　新二　　准教授　荘司　育子　　准教授　筒井　佐代 准教授　上原　順一

論　文　内　容　の　要　旨

本稿の目的は、これまで出版された日露・露日二カ国辞典に記載されていない日本語とロシア語間のフォールス・フレンドの総合分析を行い、それらの特徴を見出し、『和露フォールス・フレンド辞典』の編集のための基礎資料を提供することである。

論文は6章に分けて構成されている。

第1章では、論文の目的とその背景を述べる。

第2章では、日本語とロシア語における借用語についての先行研究を紹介し、両言語における借用語の特徴とその共通点と相違点を論じる。

第3章では、1)と2)について、日本語母語話者、ロシア語母語話者、ロシア語を母語とする日本語学習者の三つのグループに対して行った調査の結果を報告する。

1) 発音に違いが生じていていも、ロシア語話者が日本語とロシア語の中にフォールス・フレンドを見つけることができるかどうか、

2) 日本語とロシア語間のフォールス・フレンドが、ロシア語を母語とする日本語学習者に正あるいは負の言語転移をもたらすかどうか。

第4章では、対訳辞書と比較対照しながらフォールス・フレンド事典がどのように編纂されるべきかを論じ、第5章では日露の事典と新聞を資料として、日露間のフォールス・フレンドについて、具体的にその意味・用法、コロケーションについて詳細に対照し、日露フォールス・フレンド事典の基礎資料を提供する。第6章はまとめである。

第2章から第５章の概要は以下の通りである。

II　ロシア語と日本語における借用語の特徴

日本語とロシア語の語彙を対照した結果、発音が類似した数百の借用語が見出された。ロシア語と日本語の借用語を歴史的な場面から考察すると、多くの借用語は、ラテン語あるいはギリシア語に由来するものであるということが分かる。しかし、ロシア語の場合、借用語の多くは、4 世紀から 20 世紀の終わりまでに、ラテン語あるいはギリシア語から直接または西ヨーロッパ諸言語を通ってロシア語に入ってきた。それに対し、日本語の外来語は、主に 20 世紀にアメリカの英語から借用されたものである。借用の時期及び経路が異なるため、もともと同じ語に由来する現代の日本語とロシア語間における借用語の発音・意味・用法には相違が生じている。また、外国語をそれぞれの言語に取り入れるときに経る国語化の過程及び同化の程度が異なるため、借用語はさらに変容する。それ故に、ロシア語と日本語間におけるラテン語あるいはギリシア語に由来する借用語は、発音が似ているが、音韻・形態・意味的な相違点がある。

ロシア語と日本語において音韻的に対応する借用語について、音韻・文法・形態・意味の各側面から類似点と相違点を分析した。

文法的な側面からみると、ほとんどの日本語の外来語にロシア語の対応する借用語の品詞は一致している。このような単語は、「チャンス」と "шанс" [ʃans] のように主に名詞である。しかし、ロシア語の借用語に比べれば日本語における外来語の派生語は少ない。日本語の外来語は、主に名詞であり、いくつかの単語は名詞と動詞あるいは形容詞と副詞として働く。対照的に、それらに対応するロシア語の借用語は、名詞・動詞、名詞・動詞・形容詞、名詞・形容詞・副詞、名詞・動詞・形容詞・副詞などのいくつかの共通の語幹をもつ語である。例えば、日本語において共通の語幹をもつ形容詞「ローカルな」と名詞「ローカル」に対して、ロシア語において共通の語幹をもつ形容詞 "локальный" [lokal'nɨj]、名詞 "локальность" [lokal'nost']、副詞 "локально" [lokal'no]、動詞 "локализовать" [lokalizovat'] が対応している。

形態の側面から借用語を分析すると、原語の形がそのまま借用され、日本語とロシア語において構造的に一致するものがあるが、日本語特有の省略された語やロシア語特有の複合語の構成要素となるものもある。また、国語化の過程においてそれぞれの言語の規則に従って適切な品詞の形態素を得た借用語も存在し、日本語の副詞の「- に」(デリケートに)とロシア語の副詞の [-n-o] (деликатно [delikatno]) のように、それらの形態素には対応関係が見られた。

音韻の側面からは、日本語とロシア語間における発音が類似した 275 語を対照した結果 、1) "ветеран" [veteran] と「ベテラン」[beteran] における「 [v] (ロシア語) – [b] (日本語) 」のようにロシア語と日本語の音韻体系が異なることを原因とした 6 種類、と 2) "оркестр" [orkestr] と「オーケストラ」[o:kesutora] における「母音 + [r] (ロシア語) – 長母音 (日本語) 」のように単語が借用された時期や経路が異なることを原因とした 14 種類の対応関係が見出された。

意味の側面から分析した結果、両言語において発音が類似した語は、意味が一致するもの、少なくとも一つの意味が一致するが、他の意味が異なるもの、また、意味が全く異なるものが見出された。しかし、日本語とロシア語の文法・シンタクス・意味論上の現象が異なるため、借用語の意味が一致する場合にも、両言語においてはコロケーションや使われる分野が異なる場合が多い。

III フォールス・フレンド

教育的な側面からみると、日本語とロシア語における共通の意味・用法は正の転移の原因となり、異なる部分は負の転移の原因となる傾向がある。外国語の学習において、学習者の母語や先に学習した言語と現在学習している目標言語の共通点と相違点が言語転移の原因となることがあり、第二言語習得、また、応用言語学の分野で注目されている。しかし、この問題については、日本語とロシア語の対照研究はまだほとんどされていない。

日本語とロシア語間におけるフォールス・フレンドは、発音は完全に一致していない、むしろ音韻的に相当異なる単語が多いという特徴を持つが、それにも関わらずロシア語話者が日本語とロシア語の対応する単語を類推できるかどうかをまず確認した。そのために、日本語を学習していないロシア語話者にキリル文字で書かれている日本語の外来語のリストを提供し、この単語はどのようなロシア語の単語を連想させるかという質問を与え、調査を行った。

今回の識別調査で得られたデータを考察した結果、ロシア語話者にとって「イメージ」[ime:dʒi] と "имидж" [imidʒ] のように連想しやすい単語のグループと、「キャラクター」[kjarakuta:] と "характер" [kharakter] のように連想しにくい単語が存在するが、ロシア語話者は、日本語の外来語に対応するロシア語の単語の識別が可能であることが分かった。

次にロシア語を母語とする日本語学習者が、日本語とロシア語間における発音が類似する単語を聞いたり、見たり、発言したりするときに、言語間転移をおこすかどうかについて調査を行った。

日本語とロシア語間における発音が類似した語には、一致する意味・用法に加え、異なる意味・用法も存在するため、学習者にとって正の転移や負の転移の原因となる可能性が高いという仮説を立て、それを確認するために、ロシア語を母語とする日本語学習者を対象として転移に関する調査を行った。日本語の単作文に含まれた借用語の使い方が正しいかどうか判断する調査であり、調査の後ロシア語で○×判断の根拠を説明するように求め、フォロー・アップインタビューも行った。

調査で得られたデータを考察した結果、ロシア語を母語とする日本語学習者は、日本語の意味・用法を知らない場合には、ロシア語の意味・用法を援用する傾向が見られた。両言語において借用語の意味・用法が一致する場合には、それが正の転移として現れ、意味・用法が異なる場合には、負の転移として現れた。また、ロシア語を母語とする日本語学習者の中には、日本語とロシア語の語の使い方は常に異なると考えるグループが存在する。このグループは、日本語とロシア語に共通の意味・用法があっても母語の知識を援用せず、正の転移を起こさない。また、外来語を避け、その代わりに和語あるいは漢語を使いたいと主張した学習者も存在するということが分かった。

それに加えて、ロシア語を母語とする日本語学習者は、日本語能力、学習経験、日本での滞在経験にかかわらず、調査対象としたフォールス・フレンドについて全問正解した被験者は一人もいなかった。どの被験者も体系的に借用語を学習したことがなく、むしろ借用語は馴染んだ英語から借用されたため、何となく分かると考えている被験者が多かった。この結果には、第二言語習得過程において外来語に十分な注意が払われていないことが影響していると考えられる。

IV フォールス・フレンド事典作成のための方法と手順

この欠陥を埋めるために一つの方法として、日本語とロシア語間のフォールス・フレンドを比較し、ロシア語を母語とする日本語学習者向けの『和露フォールス・フレンド辞典』の作成であると考えられる。二カ国語事典編集の原則とフォールス・フレンド事典の編集の特徴を対照し、事典の編集方針を明確にした。

V 和露フォールス・フレンド事典の項目の作成

フォールス・フレンド事典は、対訳辞典の一種であるが、いくつかの特徴を持つため、フォールス・フレンドに関する辞典の編集は、二カ国語辞典編集の原理に基づくが、基礎資料、辞典構成、項目構成などが他の対訳辞典と異なる。借用語の特徴及びマスメディアが社会に及ぼす影響の大きさを考慮し、日本のインターネット版の『読売新聞』 『朝日新聞』『毎日新聞』三紙とロシアの "Комсомольская правда" 、"Аргументы и факты" 、"Российская газета" 三紙の新聞を、本稿の『和露フォールス・フレンド辞典』の基礎資料とし、各項目を作成するために日本語とロシア語間におけるフォールス・フレンドの分析を行った。先ず、日本語国語辞典と外来語の辞典7冊、 ロシア語国語辞典と借用語の辞典7冊及び日露・露日対訳辞典 8 冊の辞典に記述されている日本語とロシア語のフォールス・フレンドの定義を確認し、類似点と相違点を見出した。次に、基礎資料のデータから、 フォールス・フレンドが含まれている例を収集した。単語の意味・用法の使用実態を分析し、辞典に記述されている定義と異なる意味・用法がある場合には、新しい定義を提案した。基礎資料では、フォールス・フレンドがどのような単語と最も頻繁に共起するのかを調べ、よく使われるコロケーションを確認した。

基礎資料から得られたデータを分析した結果、古くから日本語とロシア語に入ってきた同語源の語は、現在変化しており、辞典にはまだ記述されていない新たな意味・用法を得る傾向があるということが分かった。日本語とロシア語は、英語の影響を受けているため、ファッション、スポーツ、経済、政治、 先端技術、インターネットに関する語は、アメリカの英語から両言語に借用され、以前から取り入られた語は新たな意味で再び日本語とロシア語に入っていく傾向があり、両言語間には意味が一致するものと異なるものの両方をもつフォールス・フレンドが増えていく。

また、辞典に記載されている意味・用法が現れていない場合があるため、更に広い範囲の基礎資料に基づいたロシア語と日本語間におけるフォールス・フレンドの分析が必要であると考えられる。

論文審査の結果の要旨

日本語の外来語は原語とは発音も異なり、意味・用法もずれるため、学習者を悩ませる問題の一つとなっている。クブラコヴァ氏の論文からは、目標言語における外来語が学習者の母語においても外来語として存在する場合には、想像される以上の差異が存在し、それらの語彙に関する詳しい辞典が必要であることが分かる。

異言語間において、似た発音、綴りをもち、意味がずれる語句が存在するという現象はフォールス・フレンドと呼ばれるが、本研究は日本語とロシア語に共通して存在する外来語をフォールス・フレンドとして位置づけ、日露の言語学習者や翻訳者に資するための基礎研究を行っている。

日本語とロシア語のフォールス・フレンド辞典も先行研究もまだ存在しておらず、本研究は先駆的研究であると言える。

本博士論文は、大きく三つの部分に分かれる。まず、日本語とロシア語における外来語に関する先行研究を踏まえた上で、日本語とロシア語のように大きく異なる言語間にも、フォールス・フレンドと呼べる現象が存在するかどうかが問題とされる。ロシア語母語話者（30名）に対する調査の結果、日本語を知らないロシア語話者であっても、日本語の中の外来語がロシア語と関連していることが推測できるという結果が示された。

次に、ロシア語を母語とする日本語学習者が、ロシア語にも存在する日本語の外来語に接した場合に言語転移をおこすかどうかが問われる。両言語の母語話者（各16名）によって作成された外来語を含む文について、実際に使われるかどうかを異なる母語話者（各180名）によって確認し、確認された例文を用いて日本語学習者20名について調査を行っている。その結果、正の転移と同時に負の転移もおきること、また、日本語学習者の中には日本語の外来語の使用に否定的な見解を示すものが存在することなど興味深い結果が報告されている。

そして最後に、日露フォールス・フレンド辞典がどのように編纂されるべきかが論じられる。22冊の辞書について記述を比較し、二か国語辞典の編纂の原則とフォールス・フレンド辞典の編纂の原則の違いが整理された後、日本語とロシア語の新聞（各3紙）のweb版1年分の記事から採取した用例との異同が意味・用法、コロケーションの順に詳しく検討される。結果として、辞書の記述と新聞で実際に使用される意味・用法、使用される分野等には大きな差異があり、異なる語彙を使用して翻訳するべき用例等が詳細に示された。

本稿は辞典編纂の基礎となる編集方針とともに、フォールス・フレンドが実際に使用される場合の意味・用法の違いとその記述方法が具体的に示された点が優れており、言語学習者にとって有益な研究である点が高く評価できる。

以上、論文審査の結果を踏まえ、当該博士論文が本学において博士（日本語・日本文化）の学位を授与するにふさわしい水準に達したものと判断し、五名の審査委員が全員一致で合格と結論づけた。